

# 現代日中通訳者の「信达雅」

## —インタビュー分析を通して—

“Xin Da Ya” Among Chinese-Japanese Interpreters:  
Through an Analysis of Life Story Interviews

平塚ゆかり

Yukari HIRATSUKA

**Abstract:** Yan Fu(1853-1921) is a Chinese scholar and translator who proposed “Xin Da Ya” (信达雅) as the three major principles of translation in the preface of his Chinese translation of Thomas Henry Huxley’s (1825-95) work in English, namely *Evolution and Ethics* (1893), translated as 天演論(1898). His translation theory has had a tremendous influence on Chinese translation and interpretation theory. While many papers about “Xin Da Ya” have been published, “Xin Da Ya” has been much discussed throughout the last 100 years. Using life story interviews, this paper investigates the influence of “Xin Da Ya” on current norms of translation and interpretation held by those involved in translation and/or interpretation between Chinese and Japanese. Then, it moves to consider the role perception of Chinese-Japanese interpreters, using the analysis of the norms found in the interviews with the interpreters. Finally, it considers the significance of “Xin Da Ya” today, with a particular focus on “Xin” and “Da.”

45

### 1. はじめに

中国における通訳者のもつ役割意識は、かつては劉（2006）など日中通訳者として国交回復当初からの外交交渉に携わった通訳者たちの語りにあるように、外国との交流促進のための外交官的な役割意識が強かったようである。しかし、近年では「西洋の理論研究の影響から、通訳者は見えない透明な存在であり絶対的に中立であるべき、という役割が理想であると語られるまでになっている」（任・蔣，2006，p. 61）とあるように、通訳者の役割意識は歴史的変化にともなって、徐々に様変わりをしてきている。

本稿は翻訳通訳規範についての意識をライフストーリー・インタビューという手法を用いて検証を行う。その際に、これまで中国において翻訳通訳の規範とされてきた嚴復の「信、達、雅」論の視座から分析を試みる。そして規範意識の分析結果から現代通訳者のもつ役割意識を考察し、「信、達、雅」論の現代における意義を「信」と「達」の関係を中心に再考する。

## 2. 嚴復と「信、達、雅」

### (1) 嚴復について

嚴復（1853-1921）は、中国清朝末期から中華民国誕生初頭にかけて活躍した啓蒙思想家であり翻訳家である。嚴復は福建侯官<sup>1</sup>の医者<sup>2</sup>の家庭に生まれ、幼少期から四書五經に親しんでいたが、経済的困窮から科挙受験を断念し、福州船政学堂<sup>2</sup>に学ぶ。そして5年にわたり英語、幾何学、数学、天文学、航海学などの幅広い知識を学び、シンガポール、日本などの諸外国を訪れる機会を得る。その後、1877年から2年間の英国留学を果たした嚴復は、海軍技術の習得だけでなく、西洋の文化や知識、資本主義の社会状況など多くの事象を学び吸収する。牛（1990, p. 5）が嚴復の留学経験について「帰国後の翻訳業務の基礎となり、さらには嚴復の思想の変化と進化に深い影響をもたらすことになった」と述べているように、留学は嚴復のその後の人生を大きく変える経験となった。そして嚴復は帰国後の1895年に日清戦争で母国の敗戦を目の当たりにする。敗戦という経験から嚴復は中国が立ち遅れた原因は民意の低さにあると考え、『西学』を学び、西洋の制度を導入することによって」（李，2006, p. 32）中国の民意向上を図り祖国を改革することを目標に、近代西洋思想に関する原書を自ら選び翻訳して紹介し、啓蒙思想運動を展開していった。

### (2) 「信、達、雅」について

嚴復は1898年にトマス・ヘンリー・ハクスリーの著書である『進化と倫理』<sup>3</sup>を翻訳し、その中国語翻訳版として『天演論』を発表した。『天演論』の序文である『譯例言』の冒頭において嚴復は「信、達、雅」という翻訳基準を提唱した。冒頭部の原文および訳文<sup>4</sup>は以下のとおりである。

「譯事三難信達雅。求其信已大難矣。顧信矣不達。雖譯猶不譯也。則達尚焉。〔後略〕」（嚴，1898, p. 1）（訳：翻訳作業には三つの難事がある。すなわち内容に忠実であること、ことばをわかりやすくすること、上品で典雅な文章にすることの三つである。内容に忠実なだけでもじつに難しいが、忠実さに気をとらわれて訳がわかりにくければ、訳したとしても訳していないことと同じである。ゆえに、ことばをわかりやすくすることを重視しなければならない。）

嚴復研究で知られる賀麟が『严复的翻译』<sup>5</sup>（嚴復の翻訳）において「嚴復がまずこの三基準を提出したことにより、後の翻訳者はこの翻訳三基準の支配を免れることはできないだろう」（賀，1984, p. 151）と述べたとおり、中国では「信、達、雅」論発表後に新たな翻訳基準を模索する動きもあらわれたが、議論の土台にはいつも「信、達、雅」の存在があったようである。近年においても「信、達、雅」に関する論文は数多く発表されており、「信、達、雅」に対する議論は100年を経た今もなおつづいている。

### (3) 本稿での「信、達、雅」の定義づけ

ここで「信、達、雅」のそれぞれの意味について確認しておきたい。

嚴復は『譯例言』の三段落目において、“修辭立誠。”“辭達而已。”“言之無文，行之不遠。三者乃文章正軌。亦即為譯事楷模。”（訳：修辭は忠誠を尽くし、文章は意味を伝えることに尽きる。ことばが雅やかでなければ広くゆきわたることはない。三者はすなわち文章における正しい道であり、またとりもなおさず翻訳にとっての手本となる）と述べている。楊（2005）は、この文こそが「嚴復自身の語った『信』、『達』、『雅』各々の意味を表わしており、この三者が『正しい道』、すなわち『基準』と解釈される所以である」（p. 105）と述べている。

また、孔（2004）によれば、林語堂<sup>6</sup>は1932年に発表した翻訳を芸術的見地から再考した著作『論翻譯』（翻訳を論ず）において「忠実、通順（すらすら読めてわかりやすい）、美（文章が美しい）」という翻訳基準を発表、そのなかで林は自らの基準と嚴復の「信、達、雅」論を対比させ、「忠実とは『信』であり、通順とは『達』である」と述べ、また「翻訳と芸術の関係においては『雅』ですべてを包み兼ねることはできない」としながらも、「今日にあっては『雅』の字も翻訳と言語芸術の関係と解釈することができる」と論じている（p. 13）。これには嚴復在世当時の文語文体を使用していた時代から白話（口語）文体中心となる時代の変化が背景にあり、「雅」の意味するところは時代によって変化するとの見解を示したものである。

近年では許淵冲<sup>7</sup>が翻訳基準としての「忠実」と「通順（筋が通ってわかりやすい）」を主張し、そのうえで『「信、達、雅」の「信」は『忠実』、『達』は『通順（筋が通ってわかりやすい）』であり、『雅』は白話文（口頭語）を用いる今日では、『古文の優雅さ』という本来の意味に限ることは難しいため、『修辭を重視する』という意味にするべきである」との見解を示している（程，2006, p. 305）。

以上の論考から「信、達、雅」には文学、言語学、実務家など論じる側の研究領域や時代背景などにより異なった定義づけも存在していることがわかるが、おおむね「信」は「原文に忠実な訳」、「達」は「すらすらとわかりやすい訳」との概念でとらえられていることが確認できる。本稿において筆者は許淵冲の論に依拠し、「信、達、雅」の「信」を「原文の内容に忠実であること」、「達」は「訳文はわかりやすいものにすること」、「雅」は「上品な、場をわきまえた訳文にすること」と定義し論を進める。

### (4) 〈「信」忠実性〉と〈「達」わかりやすい訳〉の両立

また20世紀における「信、達、雅」研究の多くの文献では「信、達、雅」をそれぞれ矛盾する基準と位置づけ、とくに〈「信」、忠実性〉と〈「達」、わかりやすい訳〉の共存は不可能との議論が多くみられた。韓（2006）によると、中国で19世紀後半、嚴復に遅れること26年後に誕生した陳独秀（1879～1942）は、翻訳通訳における直訳と意識を「信、達、雅」との関係に結びつけて以下のような見解を示したことを紹介している。

翻訳通訳の際には「外国語と中国語の違い」と「風習の違い」を考慮しなければならない。そのうえで直訳が可能ならばまず先に直訳を用い、直訳できない場合は意識を補助的に用いるべきである。直訳と意識は相互補完の関係にあるべきで、どちらか一方に偏るべきではない。いずれにせよ「信、達、雅」に背くべきではない（p. 40）

陳独秀が論じた「外国語」とは当時の歴史的背景からおそらく西洋の言語をさしていたと思われるが、「外国語と中国語の違い」とは「言語的差異」、また「風習の違い」とは「文化的差異」とも解釈できよう。陳の論述は「信、達、雅」は互いに矛盾する関係ではなく、あくまでも「信、達、雅」がそろってはじめて翻訳通訳の基準となることを前提として述べられていたのである。本稿では現代の日中通訳者が「信」すなわち「内容に忠実な訳」と、「達」すなわち「わかりやすい訳」を両立可能ととらえているのか否か、また文化と言語の差異をどのような規範にもとづき訳出しているのか、この点に焦点をあて分析を行う。

### 3. 先行研究

本論の先行研究としては、①「信、達、雅」に関する研究、②会議通訳者のライフストーリー・インタビュー研究、③通訳者の役割分析研究、の三つがあげられる。

①「信、達、雅」に関する研究については中国の学術論文データベース<sup>8</sup>から、通訳翻訳関連以外の学術誌や各大学の紀要掲載分をあわせて検索すると、1978年以降に発表されたものだけでも890編以上あり枚挙に暇がない。現代中国で発刊されている翻訳理論の書籍には、ほぼすべてに「信、達、雅」3基準についての記述がみられることから、今日の中国においても「信、達、雅」は通訳翻訳の基準として広く認知されていることがわかる。程（2006）は中国近現代における翻訳通訳理論研究の論考のなかで、通訳者が言及した通訳基準としての「信、達、雅」論を紹介している。また日本において発表された本論の先行研究としては厳復の翻訳理論にはじまる中国近代の翻訳理論を紹介した永田（2004[1997]）と「信、達、雅」基準から日中翻訳文を分析した荀・孫（2002）があげられる。

②の会議通訳者のライフストーリー・インタビュー研究としては、戦後の日米外交に尽力した5名の日英通訳者へのライフストーリー・インタビュー・データを分析し会議通訳者の役割について考察した鳥飼（2007）があげられる。本稿は現代日中通訳者のライフストーリー・インタビューの分析結果から通訳者の規範と「信、達、雅」を比較検証し、現代における「信、達、雅」のもつ意義を再考するものであるが、ライフストーリー・インタビューという質的研究方法を用いた「信、達、雅」研究は現在のところ中国においても日本においても行われていない。

③の通訳者の役割分析研究は、前述の鳥飼（2007）以外では任・蔣（2006）の研究があげられる。任・蔣（2006）は通訳現場における談話分析から異文化コミュニケーション現場での通訳者の役割再考を試みた研究であるが、分析例としてとりあげている通訳は対話、エスコート、商談の各通訳に限られている。本稿では日中会議通訳に従事する通訳者を研究対象とし、通訳者の規範意識から分析した役割意識を考察するものである。

### 4. 研究方法

#### （1）ライフストーリー・インタビューという手法

本稿の研究方法としては、ライフストーリー・インタビューという手法を用い、通訳者のライフストーリーにあらわれたさまざまな語りの内容を「信、達、雅」という概念的カテゴリーに照らしあわせて分析、考察を行う。ライフストーリー、もしくはオーラル・ヒストリー、口述史と呼ばれる研究方法について、トンプソン（2002）が「歴史それ自体と同じくらい古くから使われていたのである」（p. 53）と述べているように、現在に至るまで口述史料は地域を問わず、ま

たさまざまな分野の研究に使われてきた。

フリック (2002) は「人生での経験を表現するためにはナラティブ (語り／物語) の形式が適している」(pp. 46-47) と述べている<sup>9</sup>。通訳という仕事は話し手と聞き手が存在してはじめてその発話に意味をもつため、通訳者自身の声が、そのままとりあげられることはなく、通訳者の発話はその個人のものとみなされることはない。とくに本稿の研究対象はフリーランスの日中通訳者であり、中国におけるこれまでの外交通訳者と異なり、自身のことばで自らの通訳行為を語る機会は限られている。それゆえ、トンプソンのいう「英雄を指導者から見いだすのではなく、社会の大多数を構成する無名の人々に見いだす」(トンプソン, 2002, p. 49) 口述による研究手法は通訳者に焦点をあてた研究に適していると考えた。本稿では異文化コミュニケーションの第一線にいる通訳者自身が口述したデータを収集、分析、文字化するという行為を通し、記録に残らないとされた現役通訳者の声を残すという試みを行う。

各インタビューーには事前に本研究の主旨を説明し、インタビューの了解を得たあとに設問をメールで送付し一読を依頼した。通訳者の選択方法は、「機縁法」(桜井, 2002) を用いた。時にはプライベートなことに質問が及ぶことになるライフストーリー・インタビューという性格上、インタビューである通訳者とインタビュアーの筆者との間には一定の信頼関係 (ラポール) の構築が不可欠である。それゆえ、旧知の間柄である I 氏を除く C 氏、Y 氏とは実際のインタビューまでの間に国際電話やメールで何度か連絡を取り合った。その結果、初対面であった C 氏、Y 氏ともすぐに打ち解け、自然な会話からインタビューに入ることが可能になった。実際のインタビューにおいては、筆者は語りやすい雰囲気をつくりながら、インタビューーが自由な語りを行えるよう配慮して進めた。

## (2) 調査協力者

インタビュー協力者として 3 名の日本語—中国語のフリーランス会議通訳者 I 氏、Y 氏、C 氏に協力を依頼した。インタビューは 2008 年 6 月から 7 月に個別に行い、場所はそれぞれインタビューーが指定した。I 氏は日本の自宅、C 氏は中国北京の自宅付近のホテルロビーラウンジ、Y 氏は北京の自宅でインタビューを行った。以下にインタビューーのプロフィール<sup>10</sup>を記載する。

1) I 氏——女性、年齢 30 代後半。母語は中国語。中国北京市生まれ。北京人民大学第一分校 (現在は中国工業大学と合併) で 4 年間日本語を学ぶ。大学生の時にアルバイトとして通訳を経験。卒業後は日中貿易商社の北京事務所に勤務し、営業のほか、インハウス通訳にも従事する。来日後同社東京本社に転職。その後通訳養成所に半年通学し、フリーランス通訳者として活動を開始。フリーランスとしての会議通訳歴は 8 年。現在は日本国籍を取得し首都圏に在住。

2) C 氏——男性、年齢 40 代前半。母語は中国語。中国江蘇省生まれ。文化大革命で両親とともに青海省に下放され、農村で幼少期を過ごす。1978 年に英語専攻学生として青海省の専門学校に入学。卒業後英語教師に 2 年間従事したのち、北京第二外国語学院 (現在は北京第二外国語大学と名称を変更) 日本語学部へ入学。大学院時代は日本語通訳・翻訳を専攻。大学講師、日系民間企業などでのインハウス通訳者を経て、2001 年よりフリーランス会議通訳者。会議通訳歴は 7 年。中国北京市在住。

3) Y 氏——女性、年齢 30 代後半。母語は中国語、中国杭州市生まれ。中国の大学では経済を

専攻し、卒業後、三重大大学に研究生として留学。来日後に日本語の学習を開始。日本にて大手小売業、旅行社での勤務ののち、通訳案内業資格を習得し、通訳ガイドとして独立。会議通訳者をめざし通訳養成所に1年通学したのち、フリーランス通訳者として活動を開始する。現在は日本国籍を取得し北京に在住。会議通訳歴5年。

### (3) インタビュー設問

以下の設問をインタビューに事前に提示した。

- ①通訳者になるまでの貴方のこれまでの経緯をお教え願いますか。
- ② TL（目標言語）をどこで何年学びましたか。
- ③通訳訓練を受けたことがありますか。それはどこで、何年学びましたか。
- ④現在までの通訳歴は。
- ⑤現在行っている通訳の形式と頻度を教えてください。
- ⑥仕事を受ける際の判断基準はありますか。
- ⑦対面通訳の現場において二者の間で通訳者はどのような立ち位置にあると思いますか。
- ⑧通訳の現場で文化的差異を感じることはありますか。その場合、訳出の際、どのように対処しますか。
- ⑨通訳する場の違いにより通訳者の役割の違いがあると思いますか。
- ⑩貴方にとって通訳者の規範とは何ですか。
- ⑪貴方が考える通訳者の役割とは何ですか。

## 5. 分析結果

以下にインタビューの一部とその分析結果を示す。(以下、インタビュー・スクリプト部分においてI氏はI、C氏はC、Y氏はY、筆者はHと表記する)

### (1) I氏のインタビュー結果

I氏は通訳者の役割について以下のように語った。

I：そうですね。感情を入れないで、お互いの意思疎通のための道具として、あくまでも道具として、その役割を果たせばいいかなって思うんですけど。

H：文化的差異からくる誤解がなくなっていけばそれが可能？

I：うん、…多分、なくなっていれば可能ですね。100%可能ですね。少しずつ差異も小さくなればなるほど可能に近づきますね。

I氏の語った通訳者の役割は「コミュニケーションの道具」であり、日中両国の人的往来の増加で文化的ギャップが少なくなっていくほど本来の「道具」としての役割を果たすことが可能になるとの考えを示した。これは両国の文化的ギャップが少なくなれば文化的事象に影響されない言語の表層での通訳が可能になることを示していると考えられる。

I：自分がその裏の意味を読み取れたらそれ伝えなきゃコミュニケーション成り立たないよね。自分の義務だと思う、ただ表の意味伝えると誤訳になってね、間違いになってしま

うと思うんですよ。

H：ということは相当な程度の背景とか知識とかがないと…。

I：正しい通訳はできない。

H：だから表面だけのことを伝えるのが正しい通訳ではなくって。

I：その裏にある本当の意味…。意味を伝える。

しかし実際にはI氏は上述したように、通訳者は文化的差異や国民性にもとづく発話現象などにも目を向けて、ことばの本当に意味するところを訳出するべきだとも語り、それができてこそ通訳者の役割が果たせると強調した。通訳者は起点言語、目的言語双方の高度な言語能力が必要だが、I氏は通訳業務における語学の占める割合に言及し、「もちろんウエイトが大きいけれど、やはり文化的、経験的バックグラウンドとかが大きいと思いますね」と語り、語学学習だけでは通訳者にはなれないと主張した。

日本語母語話者の日中通訳者である永富も「言語の運用能力を高めるには言語のみの習得では不十分であり、言語の背景にある異文化の理解とコミュニケーション能力の養成が必要」(2007, p. 193) と語り、言語の習得だけでは通訳業務は行えないと主張している。

この点に関して、I氏は通訳現場での具体例をあげたうえで「その裏にある本当の意味…。意味を伝える」と語った。I氏は言語にある表層と深層の意味の存在を認識したうえで、深層にある意味を伝えることも通訳者の役割と考えていると推察できる。

## (2) C氏のインタビュー結果

C氏はインタビューのなかで自ら厳復の「信、達、雅」論に言及し、「(通訳者は) 忠実に。信達雅は理想郷ですけれども、できれば信だけは」と語ったうえで、「忠実さ」すなわち「信」がもっとも大事であると強調した。そのうえでC氏は通訳者として通訳現場のコンテキストや状況に応じた通訳規範を以下のように語った。

51

C：ですね。こう思うんです、同時通訳は忠実に伝える。逐次はなるべく発言者の伝えようとしている意味を伝える。

H：ああ「信、達、雅」ですね。

C：そう、同時の場合は「信」、逐次だとやっぱり「達」のほうですね、そのほかの宴会通訳などは「雅」ですかね。

通訳者はそれぞれ現場の状況を判断しながら訳出していると語ったC氏だが、実際の通訳現場では自身の規範とは矛盾する訳出を行うこともあると以下のように語った。

C：ついこの前もありましたね。日中韓の有識者会議で、そうそうたるメンバーが集まった会議で、中国のある作家がスピーチをして、かなり日本にとって失礼なスピーチをするんですよ。

H：说骂人的话（人を侮蔑した話）。

C：そう、侮辱に近い発言の仕方をするんですよね。でも同時通訳ですから。そのまま訳したんですよけれど。

H：ああ同時だったんですか。

C：さすがに罵ることばは和らげて、訳しましたけれど。

鳥飼（2007, p. 329）が、「通訳者が信条とする役割意識と、現実に通訳者が果たす役割は必ずしも一致しない場合がありえる」と述べているように、C氏の上記のような相手に対する悪口を和らげて訳出する行為は、C氏の主張する同時通訳現場での信条である「信」すなわち忠実性よりも、コミュニケーション媒介者として両者の間を取りもつという潜在的な役割意識が勝ったうえでの行為と推察される。このような行為は今回のインタビューー3名共にみられた行為である。

このことから通訳者は、現場の状況や自己に求められる役割を瞬時に判断し、主体的に訳出に臨んでいることが推察できる。

### (3) Y氏のインタビュー結果

Y氏は通訳者としての自らの規範を以下のように語った。

Y：一つはコミュニケーションを図るのが目的ですから、ことばそのものにこだわるよりも早く両方の意思疎通ができるように、という意識が私のなかにはあるみたいです。先ほど申し上げました前置きだったり言い方だったり。日本人はわりと遠まわしな言い方をしているので、私は中国人がわかるような言い方にするとか。意味がわかるように、ことばじゃなくって。自分のなかで相互に早く意思疎通ができるようにしたいなって。それが働いているようです。

52

Y氏は語義的に忠実に訳すだけではなく、より伝達するように訳出をしていると語った。これはY氏が通訳者として「達」、すなわちわかりやすく伝達することと同時に、「意味を伝える」ことを重視している姿と考えられる。またY氏はいつも受けている仕事では、「忠実に訳すことより、その場の雰囲気を感じとって内容を大胆に短縮することもある」とも語り、互いの意思疎通を果たすことが通訳者の役割であると認識していると推察できる。

## 6. 考察

### (1) 現代における「信」と「達」の意義

厳復が「信、達、雅」を提唱した19世紀後期と現代では100年以上の時間的隔たりが存在する。この間日本においても中国においても外国との交流は飛躍的に増え、翻訳や通訳の目的も意義も時代の変遷とともに変化している。本稿第2章でもふれたが、「信、達、雅」の含有する意味も、厳復の在世当時と20世紀とでは少しずつ変化をしており、今日も引きつづき変化をしていると考えられる。以下、現代における「信、達、雅」の意義を「信」と「達」に焦点をあて考察する。

前述したとおり厳復の意図した翻訳規範「信、達、雅」は三つが互いに矛盾しないことを前提にしたものであった。これは『譯例言』の記述内容からも明らかである。王宏志（2007）は「初めから終わりまで、すなわち信から始まり、達、雅に至るまで、厳復は“意味”に重点を置いていた」（p. 93）と述べているが、この考えにもとづくならば、翻訳通訳の目的は意味を伝えるためであり、意味を伝える目的を達成するための規範が「信、達、雅」と解釈できるだろう。

通訳者へのライフストーリー・インタビューの分析結果から、現代の日中通訳者もことばの「意



味」を伝えることを最大の使命ととらえていることが示された。通訳者の語った「表面ではなく裏の、本当の意味を伝える」という行為は、異文化コミュニケーション行為として語意以外の文化的概念も伝えることが役割であると解釈できる。このような行為は任（2001）のいうところの文化の深層部での「信」そのものをさしており、「本当の意味を伝える」行為こそ、「信」を、忠実性を体現した行為であり、同時に「達」、わかりやすく伝えることにも矛盾しない行為ととらえることができよう。また、任（2001）は「信（忠実性）」について「信、すなわち忠実という基準は二つの階層を含有しているはずである。一つは語義的な、文化の表層部での『信』、二つ目は文化の深層部での『信』である」（p. 31）と述べ、文化の深層部における「信（忠実性）」は「訳語読者に原文の語意のみでなく、原文の情趣やスタイル、色彩などの深層部にある文化的内包をも伝えること」（p. 31）との見解を示しているが、Y氏の「意味がわかるように、ことばじゃなくって」との語りにあるように、通訳者は単にわかりやすく伝えるだけでなく、原文に内在する文化を含めた情報を伝えようとしていると推察できる。

結論として、通訳者の「『信』重視」、「『達』重視」などの信条とは別に、通訳者は通訳現場において言語的差異や文化的差異を包含した「意味を伝える」という通訳者の役割を果たそうとしており、このような姿勢こそ「信（忠実性）」と「達（わかりやすさ）」を矛盾することなく同時に実現しようとしている姿ではないかと考えられる。

## （2）現代通訳者のなかに存在する「信、達、雅」論

本稿では3名の日中会議通訳者のインタビューから役割意識の分析・考察を試みたが、インタビューの設問にはインタビュアーである筆者が答えを誘導しないように、という配慮もあり「信、達、雅」についての設問はあえて入れなかった。しかしながら語りのなかで、各インタビュイーが、それぞれのことばで自然に「信、達、雅」の3基準に言及したことは興味深い。これは厳復の「信、達、雅」基準が現代日中通訳者の中に厳然と生き残っている証左とみることができる。本稿の結果は、100年以上前に中国で誕生した「信、達、雅」が現代の異文化コミュニケーション的視座に立った通訳研究にも示唆を与える規範であることを明示するものだといえよう。

## 7. まとめと今後の課題

鳥飼（2007）は、通訳者は「実際の場合では異文化コミュニケーションに欠かせない存在として、それぞれが自主的な判断でポジショニングを決めている」（pp. 368-369）と述べているが、本論のインタビュー調査を通して日中通訳者もその果たす役割においては、通訳者自身が主体的に判断してその場に応じた役割を担っていることが示された。

この結果は、通訳行為とは通訳者という人間を通しての行為である以上、通訳者が透明な状態で何のフィルターも通さず訳出を行っていると考えすることは難しいことを再認識させるものであろう。

王恩科（2007, pp. 6-9）は異文化コミュニケーション行為としての翻訳（通訳）行為に影響を与える要因として「翻訳（通訳）者の言語的素地、文化的素養と文化意識、前構造（cultural pre-structure）<sup>11</sup>」をあげているが、これは発言者の意図を通訳者が創作するということではなく、通訳者にも潜在的な意識というフィルターがあり、それにより訳出行為に影響が出ることをさすものである。この点は今後の研究課題としてさらに分析調査を進め検証していきたい。

最後に本稿の問題点を指摘しておきたい。周知のとおり「文化」の概念は広義であることから、ライフストーリー・インタビューで通訳者が語った文化が何を示すかの定義は難しく、本稿は中国文化論や中国語学などの複合的視点から掘り下げた論にはなっていない。また「信、達、雅」についての概念についても各通訳者がどうとらえているかを、さらに検証していく必要があると考える。今回はライフストーリー・インタビュー・データからの分析のみを行ったが、さらに検証を進めるためには実際の通訳者の訳出分析を行う必要がある。また今回は中国語母語話者の日中通訳者インタビューのみを分析したが、日本語母語話者の日中通訳者との比較も今後の課題としたい。

## 註

- 1 現在の中国福建省福州市。
- 2 1866年に清代の船政大臣が福建福州馬尾港に開設した海軍学校。
- 3 原著は *Evolution and Ethics* (1893)。
- 4 本稿での中国語の日本語訳はすべて筆者の訳による。
- 5 初稿は1925年『東方雑誌』第22巻第21号において発表。
- 6 林語堂 (1895-1976)。文学者、言語学者、評論家。代表作に『北京好日』などがある。
- 7 許淵冲 (1921-)。北京大学教授、翻訳家。『赤と黒』など多くの文学作品の中国語翻訳を手がけた一方で『詩経』、『楚辞』などの中国古典文学を英語フランス語に翻訳し海外に紹介した。
- 8 中国には学術論文データベースがいくつか存在するが、ここでは中国知網 <http://www.cnki.net/index.htm> を参照した。
- 9 同時にフリックは「自分のライフヒストリーについてのナラティブは単なる事実経過のコピー／表象ではない」ことも念頭におかねばならないと言及している。
- 10 プロフィールはインタビューを行った2008年7月現在のものである。
- 11 ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976) が提唱した概念。前構造について王 (2007) は「人の行う情報解釈という行為はゼロから始まるのではなく、自己の世界観や価値観、意識形態や既存の情報や、過去の経験が基礎となって解釈を行う」(p. 9) と述べている。

## 参考文献

- 程永生 (2006). 「国内现当代研究翻译理论之概况篇」马祖毅ほか (著)『中国翻译通史 现当代部分 第四卷』(279-406 頁). 武漢: 湖北教育出版社.
- フリック, U. (2002). 『質的研究入門: 〈人間の科学〉のための方法論』(小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子・訳). 春秋社. [原著: Flick, U. (1995). *Qualitative Forschung*. Rowohlt Taschenbuch: Reinbek bei Hamburg].
- 韓江洪 (2006). 『严复话语系统与近代中国文化转型』上海: 上海译文出版社.
- 賀麟 (1984[1925]). 「严复的翻译」羅新璋 (編)『翻譯論集』(150-151 頁). 北京: 商務印書館.
- 孔繁明 (2004). 『日汉翻译要义』北京: 中国对外翻译出版公司.
- 李曉東 (2006). 『近代中国の立憲構想』法政大学出版局.
- 劉德有 (2006). 『日本語と中国語』講談社.
- 永田小絵 (2004[1997]). 「『信、達、雅』をめぐる中国近代の翻譯論」日本通訳学会『通訳理論研究』論集編集委員会 (編)『通訳理論研究論集』(313-326 頁). 日本通訳学会.
- 永富健史 (2007). 『中国語の情報構造と伝達機能』中国書店.
- 牛仰山・孫鴻寬 (1990). 『严复研究資料』福州: 海峡文艺出版社.
- 任文・蔣莉華 (2006). 「从话语分析的角度重识口译人员的角色」『中国翻译』2006年第2期第27卷,

61-65 頁.

任犹龙 (2001). 「翻译—标准和责任」『日语学习与研究』2001 年 03 期, 31-35 頁.

桜井厚 (2002). 『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

トンプソン, P. (2002). 『記憶から歴史へ——オーラル・ヒストリーの世界』(酒井順子訳). 青木書店. [原著: Thompson, P. (2000[1978]). *The voice of the past: Oral history* (3rd ed.). Oxford & New York: Oxford University Press].

鳥飼玖美子 (2007). 『通訳者と戦後日米外交』みすず書房.

王恩科 (2007). 「翻译与翻译研究」王恩科・李昕・奉霞 (编著)『文化视角与翻译实践』(1-15 頁). 重庆: 国防工业出版社.

王宏志 (2007). 『重译“信、达、雅”——20 世纪中国翻译研究』北京: 清华大学出版社.

荀涛・孙玲 (2002). 「关于“信、达、雅”翻译标准的探索—浅谈日中互译时的几种现象」『杏林大学研究年報』第 5 号, 61-73 頁. 杏林大学附属国際研究所.

嚴復 (1898). 『天演論: 嚴幾道譯述』北京: 商務印書館.

杨晓荣 (2005). 『翻译批评导论』北京: 中国对外翻译出版公司.